

【旧約聖書日課】ミカ書 6章6～8節

- 6 何をもって、わたしは主の御前に出で
いと高き神にぬかずくべきか。
焼き尽くす献げ物として
当歳の子牛をもって御前に出るべきか。
- 7 主は喜ばれるだろうか
幾千の雄羊、幾万の油の流れを。
わが咎を償うために長子を
自分の罪のために胎の実をささげるべきか。
- 8 人よ、何が善であり
主が何をお前に求めておられるかは
お前に告げられている。
正義を行い、慈しみを愛し
へりくだって神と共に歩むこと、これである。

【使徒書日課】エフェソの信徒への手紙 4章17～32節

¹⁷そこで、わたしは主によって強く勧めます。もはや、異邦人と同じように歩んではなりません。彼らは愚かな考えに従って歩み、¹⁸知性は暗くなり、彼らの中にある無知とその心のかたくなさのために、神の命から遠く離れています。¹⁹そして、無感覚になって放縱な生活をし、あらゆるふしだらな行いにふけてとどまるどころを知りません。²⁰しかし、あなたがたは、キリストをこのように学んだものではありません。²¹キリストについて聞き、キリストに結ばれて教えられ、真理がイエスの内にあるとおりに学んだはずです。²²だから、以前のような生き方をして情欲に迷わされ、滅びに向かっている古い人を脱ぎ捨て、²³心の底から新たにされて、²⁴神にかたどって造られた新しい人を身に着け、真理に基づいた正しく清い生活を送るようにしなければなりません。

²⁵だから、偽りを捨て、それぞれ隣人に対して真実を語りなさい。わたしたちは、互いに体の一部なのです。²⁶怒ることがあっても、罪を犯してはなりません。日が暮れるまで怒ったままではいけません。²⁷悪魔にすきを与えてはなりません。²⁸盗みを働いていた者は、今からは盗んではいけません。むしろ、労苦して自分の手で正当な収入を得、困っている人々に分け与えるようにしなさい。²⁹悪い言葉を一切口にしてはなりません。ただ、聞く人に恵みが与えられるように、その人を造り上げるのに役立つ言葉を、必要に応じて語りなさい。³⁰神の聖霊を悲しませてはいけません。あなたがたは、聖霊により、贖いの日に対して保証されているのです。³¹無慈悲、憤り、怒り、わめき、そしりなどすべ

てを、一切の悪意と一緒に捨てなさい。³²互いに親切にし、憐れみの心で接し、神がキリストによってあなたがたを赦してくださったように、赦し合いなさい。

【福音書日課】マルコによる福音書 10章46～52節

⁴⁶一行はエリコの町に着いた。イエスが弟子たちや大勢の群衆と一緒に、エリコを出て行こうとされたとき、ティマイの子で、バルティマイという盲人の物乞いが道端に座っていた。⁴⁷ナザレのイエスだと聞くと、叫んで、「ダビデの子イエスよ、わたしを憐れんでください」と言い始めた。⁴⁸多くの人々が叱りつけて黙らせようとしたが、彼はますます、「ダビデの子よ、わたしを憐れんでください」と叫び続けた。⁴⁹イエスは立ち止まって、「あの男を呼んで来なさい」と言われた。人々は盲人を呼んで言った。「安心しなさい。立ちなさい。お呼びだ。」⁵⁰盲人は上着を脱ぎ捨て、躍り上がってイエスのところに来た。⁵¹イエスは、「何をしてほしいのか」と言われた。盲人は、「先生、目が見えるようになりますのです」と言った。⁵²そこで、イエスは言われた。「行きなさい。あなたの信仰があなたを救った。」盲人は、すぐ見えるようになり、なお道を進まれるイエスに従った。

「呼んで来なさい」【こども説教のために】

日曜日の教会には、本当にいろいろな人が集まってきます。日曜日の礼拝は、神がご呼びくださった者であればだれでも加わることのできる営みです。

主イエスは、神は分け隔てされることなくだれのことをもお招きくださっている、ということをお教えたくださったお方でした。そのことを、主イエスは旅を続けながらお教えくださいました。はじめは弟子たちを招き、そこに加わって来る大勢の群衆も一緒に、神がご呼びくださる者であればだれでも加わることのできる生き方を導いてくださったのです。

エリコという古い町を訪ねて、そこから出発しようとした時のことです。道端に一人の盲人が物乞いをして座っていました。彼は、目が見えませんでした。大勢の人々が一緒になって歩いて行くのに気づいたのでしょう。道行く人に聞くと、それは、**ナザレのイエス**に導かれて行く人たちでした。そこで、「**ダビデの子イエス、わたしを憐れんでください**」と叫び始めました。自分もこの人たちに加わりたい、置いてきぼりにされたくない、と思ったのかもしれませんが。ところが、多くの人が彼のことを叱りつけて黙らせようしました。盲人で物乞いをしていたような者は、足手まといになるから一緒に生きていくことができない、と思ったのかもしれませんが。けれども、主イエスは立ち止まって、「**あの男を呼んで来なさい**」と言われました。人々は、彼に「**安心しなさい。立ちなさい。お呼びだ**」と言って、招きました。彼は、**上着を脱ぎ捨て**ました。その上着は、彼が盲人で物乞いであることのしるしだったからです。主イエスに招かれて、共に行くことになった今は、今までとは違う新しい上着を着せていただけるに違いないからです。

「見えるようになりたい」

終戦記念日の8月15日をそれぞれの祈りのうちに過ごして、今日の日曜日を迎えられたことでしょう。この記念日を巡って、わたしたちはそれぞれに古い記憶を呼び覚まされます。わたしの様に戦後生まれの者であっても、子ども時代に戦争を経験した両親を通して、また大人として過ごした祖父母たちを通して、幼いときから固有の記憶を植えつけられてきました。わたし自身のことと言えば、昭和20年6月にフィリピンの山中で戦病死したとされる祖父について聞かされてきた記憶が、この季節になると必ず呼び覚まされるのです。

しかしながら、8月の「平和への祈り」を重ねる季節は、わたしたちにとって、ただ80年以上前にこの国で為されていた戦争のことを振り返るだけのときではありません。今の時代に生きる者として、殊に「平和を実現する者」となることへと強く促されているキリスト者として、どのような道を行くべきなのかを問われ、模索し、示されることを求めて祈るときでもあるのです。

主イエスは、「平和を実現する人々は、幸いである。その人たちは神の子と呼ばれる」(マタイ5:9)と言われました。「あなたがたは、神の子と呼ばれるようになりなさい」と言われたのです。「そのために、平和を実現する者になりなさい」と言われたのです。主イエスがお示くださったのは、わたしたちが、ただ自分の心の平安を得ることではありません。自分一人が平和でいられればよい、というのでもありません。周囲から見られて、「この人たちは、平和を実現するために生きようとしている」、「神の実現してくださる平和のために生きようとしている」と思われるような振る舞いをし、生き方をすることをも、主イエスはお教えたのです。

残念ながら、わたしたちは、まだ「神の子」として主イエスのように成熟していないところがあります。まだ未熟で幼児のような状態なのでしょう。もしかすると、生まれたばかりの嬰兒のように、自分のことも周囲のこともはっきりと見えないままの状態なのかもしれません。それでも、わたしたちは、主イエスを知り、主イエスと出会わされた者として、願わないではいけないのです。主イエスのように「神の子」として成熟することを。自分自身のことも、周囲のことも、もっとはっきりと見えるようになって、「平和を実現する者」としてふさわしいこととふさわしくないことを見分けられるようになることを。

「何をしてほしいのか」と主イエスに問われた盲人は、「目が見えるようになりたいのです」と言いました。自分で何でもできるようになるため、ではありません。見えるようになって、なお「神の子」として完成されるための道を先に進まれる主イエスに従って行くためです。

「新しい人」

主イエス・キリストというお方の姿がはっきりと見えるようになるために、その行かれる道がどこを目指されたものであるのか見えるようになるために、わたしたちは、まずはともかく、このお方の近くに進み行かなければなりません。近づけば、見えないなりに分かるようになることがあるのです。

けれども、もしかすると、このお方の弟子たちや周囲を取り巻く人々は、一人の人が主イエスに近づくことの妨げになることがあるかもしれません。主イエスの弟子を自称する者が、主イエスではなく自分たちに従うことを求めてくることがあるかもしれません。主イエスによって呼び集められたはずの人々の営みが、ただ主イエスに近づくことを願う一人の人の声を黙らせてしまうことがあるかもしれません。牧師がそのようなことを為す者であったならば、教会がそのような営みを為すところであったならば、それは悲しむべきことです。

そのような事態に陥ったならば、主イエスは、憤られ、叱られ、ただおっしゃるでしょう、「その人を**呼んで来なさい**」と、「子供たちをわたしのところに来させなさい。妨げてはならない」（マルコ 10:14）と。

わたしたちは皆、あの盲人のように、自分の上着を脱ぎ捨てなければなりません。自分を自分たらしめていると自分で思い込んでいる古い自分を、脱ぎ捨てなければなりません。わたしたちをお呼びくださる主イエスは、新しく上から着るものを、ご用意くださっているのです。使徒パウロが言う「**神にかたどって造られた新しい人**」を身に着けさせてくださるのです。いいえ、主イエスご自身が、わたしたちの新しく身に着けるべき「**新しい人**」となつてくださるのです。

上着を脱ぎ、古い自分を脱ぎ捨てたならば、裸のままでいてはいけません。裸になって、自由を得たつもりになってはいけません。それは、しばしば幼児がそうするように、気ままに自分勝手な振る舞いに過ぎないからです。

わたしたちが新しく身に着ける「新しい人」は、一人のお方、主イエス・キリストなのです。このお方を身に着けて、その「**体の一部**」とされるのです。「互いに体の一部」として、いかに振舞い、いかに生きるべきか。使徒パウロは、言葉を尽くして教えています。それは、主イエスがお教えくださったことでもあるのです。主イエスの進み行かれた道の道標なのです。

礼拝のおわりに、「**平和のうちに出て行きなさい**」と派遣の言葉を告げます。主イエスの御言葉に従ったものです。ここで、礼拝の営みを通して、教会の営みの中で、昨日までの自分を脱ぎ捨て、「新しい人」を着させていただいて、「平和を実現する者」として少し成熟した「神の子」として、わたしたちは、この世へと出て行くのです。そのすべてを、わたしたちは見られています。